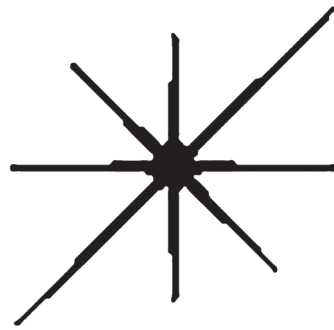


# コミット通信 6



*comet book club*

éds. de la rose des vents - suiseisha

目次

【特集——〈内戦〉下のアメリカ】

ドナルド・トランプの神話学

武隈喜一—————03

21世紀に「アメリカのデモクラシー」は可能か

——分断の政治のあとに

毛利嘉孝—————06

〈内戦〉を記録するヒップホップ

金澤智—————08

『僕の大統領は黒人だった』と『アメリカの病』に観る  
アメリカの人種的分断

池田年穂—————10

ブランショと読者

門間広明—————12

いくつかの結び目

——ユベール・ダミッシュ『カドミウム・イエローの窓』によせて

星野太—————14

ケアとごまかし

田口陽子—————18

【連載】

翻訳のない世界

——Books in Progress 6

関根慶—————20

大八木監督から石川選手へ

——裸足で散歩 6

西澤栄美子—————21

【特集——〈内戦〉下のアメリカ】

## ドナルド・トランプの神話学

武隈喜一

1月20日午前8時20分、トランプ大統領は、メラニア夫人と手を携えてホワイトハウスから南側の芝生に駐機する海兵隊の大統領専用ヘリ、マリーンフォース・ワンに向かって歩きだした。ロープの外側にいる記者たちを見つけると、大統領は立ち止まって彼らの方を向き、こう言った。

「さよならが言いたいだけだ。だが、長いさよならにならないことを望む。また会うだろう」

大統領夫妻を乗せたヘリコプターは首都ワシントンD.C.の上空を名残惜しそうに2、3回大きく旋回すると、フロリダの別荘へ向かう大統領専用機エアフォース・ワンの待機アンドリュース空軍基地へ向かって飛び去っていった。4年間の「トランプ時代」が終わった。

そしてマー・ア・ラゴの別荘でドナルド・トランプが目を覚ました1月21日は、米国で最初の新型コロナウイルス感染者が報告されてからちょうど1年目だった。

その1年にわたるトランプの選挙戦と新型コロナへの対応を追い、メディアがこの異常な選挙戦をどう伝えたかをまとめたのが、『絶望大国アメリカ——コロナ、トランプ、メディア戦争』だ。

本書校了後の2021年1月6日には、「徹底的に戦え、徹底的に戦わなければ、この国を取り戻すことはできない！」という大統領の演説に煽動されたトランプ支持者たちが議事堂を襲い占拠するという暴動が起きた。しかし、選挙戦でのトランプの言動を追ってきた者としては、その光景に驚きはなかった。

『絶望大国アメリカ』の末尾にはこう書いた。「トランプ大統領が法の手続きの中で抵抗できる余地は、もはやない。そして、言葉と法を超えたところには、むきだしの暴力しか残っていないだろう」。

1月6日の議事堂の騒擾は、その延長線上に出現した出来事だった。選挙戦でのトランプ大統領の言動は、いつでも暴力を誘発しかねない発火装置だったからだ。

その議事堂占拠後に行われたCNNの世論調査（1月9～14日）でもなお、バイデンを「選挙に勝った正統性のある大統領」として認めている人は65パーセントにすぎず、32パーセントは「その勝利に正統性はない」と見なしている。

トランプがフロリダに去った日、就任式で「結束」を呼びかけたバイデン新大統領の演説は、力強く誠実だった。だが、大統領の正統性を認めない3分の1の人びとに、その言葉は届いただろうか。

また、世論調査では、「今日の米国の選挙は国民の意思を反映していると思うか」という問いに、「そう思う」と答えたのが59パーセント。一方で、40パーセントもの人びとが「そう思わない」と答えている。

トランプ大統領が「盗まれた選挙」という〈オールタナティブ・ファクト〉を何度も訴えてきた挙句、いまや米国では「公正な選挙」という民主主義の前提を支える言葉は、「民主党による選挙の不正」という陰謀論と同列の政治的言説にまで貶められてしまった。

優れた東欧史研究者ティモシー・スナイダーが指摘するように、トランプの政治手法は、国民に社会的な前進を促すのではなく、たえず内側に巣食う不安と劣等感という感情を刺激して行動を煽るものだった。

改革を議論するのではなく、劇場をつくりだすこと。未来の希望と可能性を提示するのではなく、作り上げた危機を連綿と続け、明確な敵を永久に与え続けること。置かれている生活の状態を変えることができないことに絶望した人びとは、政治の意味は体制の変革ではなく、日々の感情の変革にあるということを受け入れる。そして彼らは自分自身や友人や家族のより良き未来を考えることを止め、誇るべき過去からの絶えざる呼び声を受け入れるのだ。

(“The Road to Unfreedom”, p. 260)

スナイダーはそうした政治を、過去の歴史の神話的栄光に依拠する「永遠性の政治学」と呼んだ。米国中西部および南部の、文化的にも経済的にも東西両岸都市のエスタブリッシュメントやメディアから見捨てられた多くの白人労働者層の不平と不満を吸収したトランプの「メイク・アメリカ・グレイト・アゲイン」は、その典型的な政治現象だった。

トランプの選挙集会は、大統領専用機エアフォース・ワンという「力」の象徴を背景に置いて、集団的な興奮を作り上げ、常に敵を名指ししながら、トランプという「過去の栄光の再来を約束する王」を聖なるものとした。

「盗まれた選挙」について繰り返し喧伝することで、「盗まれた歴史と本来ありえた栄光」という「大きな物語」を紡ぎ出す虚偽と陰謀論の〈オールタナティブ・ファクト〉は神話作用を遂げた。「神話」は「事実」や「現実」の前でも揺るがぬ別の次元を生きる。そして「神話」は劇化され、信奉者がそのドラマに集団として参加する儀式を通して、「もうひとつ別の現実」となる。

1月6日の議事堂の騒乱は、トランプ支持者をひとつの劇的行動にまとめ上げる壮大な儀式となった。儀式は反社会的であればあるほど、参加者の結束を強くし、「神話」をきわだたせる。

米国の歴史では、南北戦争後、敗れた「南部連合」の地域で、南部は「北部人 (Yankee)」の侵略の犠牲となったのであって、奴隷制廃止というのは戦争の口実に過ぎず、もともと北部人は南部の豊かな土地を分捕り、政治的、文化的、宗教的に南部を征服することが目的だったのだ、という集団的記憶にもとづいて、「南部連合」の神話化が行われた。

さらに、それは南部に深く根づいたキリスト教福音主義と結びつき、白人の優位性と白人の宗教を守るために「英雄的に」戦い、敗れ去った南部連合軍のロバート・リー将軍や、犠牲となって斃れた南軍の兵士たちに、「十字架のイエス」の姿を投影することになる。本来、愛と救済の宗教であるはずのキリスト教が、南部ではKKK (クー・クラックス・クラン) という暴力的な人種差別団体を生み、日曜日に礼拝に通う人たちが、時には黒人をリンチし、木に吊るしたのは、この歪んだ「集団的記憶」によるものだった。

こうした、「邪悪な不正がなければ本当は自分たちが勝っていたのだ」という「神話的意識」は、南北戦争からトランプ崇拝に至るまで連綿と続いている。

ドナルド・トランプは中西部と南部を中心とする白人キリスト教信者に支えられてきたが、彼らの多くは、「アメリカ合衆国は神の恩寵であり、白人キリスト教徒によって、白人キリスト教徒のために作られた国である」と固く信じている。彼らは民主党リベラル派の「神なき」社会主義者や、〈ブラックライヴズ・マター〉の活動家や同性愛者が招いた精神と文化の「荒廃」から、この国を救い出す「聖なる救世主」として、ドナルド・トランプを「神に定められた者」と受けとめてきたのだった。元首席戦略官スティーヴ・バノンがトランプの戦いを「文化戦争」と位置づけた意味はそこにあった。

1月6日、議事堂へ向かう途中、武装右翼集団〈プライド・ボーイズ〉の一団は立ち止まって膝をつき、十字架を前にイエス・キリストへの祈りを捧げた。彼らは「神の祝福の中にある大いなる国民」のた

めに神に感謝を伝え、「神に拠って立ち、われわれの文化に拠って立つ勇氣と強さをお与えください」と祈った。そして立ち上がると、議事堂を目指して行進を続けた。その周囲には「イエスはわが救い主、トランプはわが大統領」、「神の盾」、「イエス・キリスト 2020」などと書かれたプラカードが立ち並んでいた。

議事堂への乱入について、メディアでは多くのコメンテーターが「米国の民主主義の聖なる場所を冒瀆する暴挙だ」と乱入者たちを非難した。

しかし、トランプを支持する白人キリスト教ナショナリストにとっては、人工中絶を支持し、教育現場でのキリスト教の祈祷を禁止し、同性婚に支持を表明してきたこの議事堂こそが、「神の恩寵によって与えられた」この国の建国の精神と、神の意志を裏切りつづけてきた象徴に他ならなかったのだ。

議事堂になだれ込むトランプ支持者たちが手にしていたものは、これまで一度も議事堂で翻ったことのない「南部連合旗」と、十字架と、そして「トランプ 2020, キープ・アメリカ・グレート」の旗だった。

ドナルド・トランプと〈トランプ的なもの Trumpism〉は、白人の優位性と白人の宗教を守るために戦い、邪悪な不正によって追われた〈聖戦の戦士〉として、今後も集団的記憶の中に残り続けるだろう。

執筆者について——

武隈喜一（たけくまきいち） 1957年生まれ。テレビ朝日アメリカ社長。小社刊行の主な著者には、[『絶望 大国アメリカ——コロナ、トランプ、メディア戦争』](#)、[『マンハッタン極私的案内』](#)、[『黒いロシア 白いロシア——アヴァンギャルドの記憶』](#)などがある。

【特集——〈内戦〉下のアメリカ】

## 21世紀に「アメリカのデモクラシー」は可能か

——分断の政治のあとに

毛利嘉孝

バイデン大統領の就任式が、1月20日に終わった。2週間前の議会議事堂の襲撃を受けて厳戒態勢の中で行われた就任式は、トランプ元大統領が欠席するなど異例づくめではあったが、結果的には混乱もなく、とりあえず無事に政権が交代したことをアピールするものとなった。

国民の結束を訴え、支持者だけではなく「すべての国民の大統領」になることを誓ったバイデン大統領の演説は、概ねメディアでは好意的に受け入れられたようだ。レディ・ガガ、ジェニファー・ロペス、ガス・ブルックスといった多様な文化的バックグラウンドをもった歌手たちのパフォーマンス、そして何よりも22歳の女性詩人のアマンダ・ゴーマンの力強い朗読は、トランプ政権によって広がった分断を多少なりとも治癒する可能性を期待させるものだった。

4年間にわたってトランプ大統領に振り回されたテレビや新聞などのマスコミは、ほっと一息ついているように感じられる。私自身も、トランプ政権の4年間があまりにも排外主義的、人種差別的だったので、今回の就任式には、自分でも意外なほど心が動かされた。

もちろん、事態を過度に楽観視することはできない。依然としてトランプの人気は高く、その熱狂ぶりはカルト的な新興宗教にも似て、危険な香りがする。共和党支持者の多くは前回の選挙に不正があったと信じているという調査結果もある。Qアノンに代表される陰謀論は、いまだにSNSを中心に拡散している。何よりも、当初予想された以上に接戦となった選挙結果は、アメリカの政治の安定に暗い影を落としている。この影は、次の選挙までの4年間消えることはないだろう。

しかし、アメリカという国の分断をトランプの共和党政権のみが引き起こしたと考えると誤りだ。東西冷戦構造の終焉から始まったグローバリズムと新自由主義的経済は、ごく一部に富を集中させる一方で多くの人々を貧困へと陥れた。このことに関しては、民主党も共和党も大して違いはない。むしろ、新自由主義的でグローバルな新しい資本主義は、多種多様な価値観を称揚し、それを新しい経済成長の活力として包摂し、表面的には多文化主義とは必ずしも相性は悪くない。民主党が押し出している多様性という価値観は、新自由主義的グローバリズムと表裏一体なのである。

二極化は、オバマ政権下でも確実に進行していた。トランプは、アメリカを分断したとされるが、ある意味でトランプ政権以前に進んでいた分断を可視化させたただけだともいえる。トランプは、この分断の中で忘れられ、不可視化されていた人々、たとえばラストベルトと呼ばれる古い産業地域に住む没落した白人の（元）中流階級に訴えかけたのだった。とはいえ、トランプにしても経済政策に関しては決定的な解決策を持っていたわけではない。その結果彼が採用した唯一の方策は絶えず敵を発見し、怒りの矛先を政権ではないどこかに他のものに向けさせることだった。

アメリカは再び一つになれるのか——

バイデンは分断ではなく<sup>ユニファイ</sup>結束を訴えた。有色人種で女性初の副大統領、カマラ・ハリスの起用は多様性の尊重の象徴になるだろう。このこと自体は決して悪くない。けれども、このことは〈偉大なアメリカ〉の歴史にべったりと張り付いている〈白人の男性らしさ〉が醸成してきた理念とは相入れな

い。トランプはアメリカに潜む人種差別主義と性差別主義というパンドラの箱を開けてしまったのだ。そして、この二つの差別は、階級という経済的な格差による分断の構造的な様態である。

近代的な資本主義の病は根深い。既存の経済制度を前提とする限り、民主党政権がすべての問題を一気に解決し、アメリカを結束させるとは考えられない。むしろ拙速で安易な結束への熱望は、(トランプのような) 21世紀的なファシズムを再び誘引するだろう。中国やロシアなど権威主義的性格が色濃い国家がグローバルな覇権を握りつつあるように見える今、なおさらその危機は高まっている。

この時代に求められるのは、全てを一気に「結束」させるようなカリスマ的な指導者や強い国家ではない。その一方でコミュニズムやエコロジーといった大きな理論的枠組みは思考実験として重要かもしれないが、物理的な暴力を伴った革命や全人類的な意識の奇跡的な覚醒でも起こらない限り、即座に政治的な力を得るのは難しいだろう。しばらくは、分断を前提としながらもアドホック的に目の前の問題をねばり強く解決していくほかはないのではないか。

けれども、このことは、アメリカを支えてきた民主主義の理念を再考する契機となるかもしれない。大統領制や選挙制度、代議制は、アメリカの民主主義の重要ではあるが、あくまでも一つの要素にすぎない。フランスの政治家・思想家、アレクシ・ド・トクヴィルは、18世紀初頭に当時新興国だったアメリカを旅し、『アメリカのデモクラシー』を著した。民主主義論の古典であるこの本の中で、トクヴィルは数による政治が支配する「民主主義」の墮落を批判しつつ、タウンシップと呼ばれる小さな共同体やカウンティの議論が、州や国家の議論よりも優先するDIY的でボトムアップ型の政治をアメリカの民主主義の可能性として称賛した。彼は、人々が代表制・代議制ではなく、直接政治の主権者として関わる独特のあり方に感銘を受けたのである。

分断の後に取り戻すべきは、多数決の論理——選挙制度はその代表的なものだ——による「結束」ではなく、再び個々の人々に主権を与える粘り強い民主主義の実践である。そして、これはアメリカの民主主義をついぞ学ぶことがない日本の民主主義を批判的に考えることでもあるだろう。

執筆者について——

毛利嘉孝(もうりよしたか) 1963年生まれ。東京藝術大学大学院教授。専攻=社会学, 文化研究・メディア研究。小社刊行の主な共著書には、『白川昌生 ダダ, ダダ, ダ』、『芸術と労働』、『JAPANORAMA——1970年以降の日本の現代アート』(近刊) などがある。

【特集——〈内戦〉下のアメリカ】

## 〈内戦〉を記録するヒップホップ

金澤智

プロ・スポーツ選手たちが人種差別への抗議を盛んに表明するようになった2017年、大物ヒップホップ・アーティストのジェイZは、10月の『ニューヨーク・タイムズ』のインタビューで次のように発言した。「正しいことを信じる指導者が援護してくれていると、正しいことをしようとする人々のモチベーションが高まる。」「ヒップホップ界の哲学者」の異名をとるジェイZらしい見事な洞察だ。「指導者」とは全米バスケットボール協会のコミッショナー、アダム・シルヴァーを指していた。

当時は見事な洞察であったはずの言葉が、すっかり逆の意味になってしまうのがアメリカの皮肉だ。2021年1月に連邦議会議事堂を襲撃した暴徒たちはみな、自分が正しいことをしていると信じていたのである。そしてその背後にはまさにその考えを鼓舞する指導者の存在があった。正しいことをする、という行動の倫理が、アメリカでは完全に転覆されてしまった。

議事堂に集結した暴徒は、星条旗だけではなく、分断を象徴する南部連合旗をも掲げていた。南北戦争のようなリアルな内戦ではなく、今回の状況に対して〈内戦〉という言葉を用いるのなら、アメリカ合衆国は建国以来つねに〈内戦〉状態にあり続けているといえる。私は前著『アメリカ映画とカラーライン』（2014）で、人種境界線によって分断されるアメリカ社会を映画作品の分析を通じて論じた。その序章を「カラーライン（ズ）の世紀」と題し、断層線が複数存在する今世紀的な考えを導入した。肌の色を分断する color line だけが問題となるのではない。貧富の差を示す collar line もまた厳然と存在する。さらにはジェンダーによる分断、性的マイノリティ、宗教……断層線は幾重にも張り巡らされている。

そして新著『ヒップホップ・クロニクル』（2020）では、ヒップホップとは自由を獲得するための「闘争」だと私は記した。警察の暴力、ギャング抗争、ドラッグ・ウォー、イースト・コーストとウェスト・コーストのラップ抗争、表現の自由、男女対立、キリスト教 vs イスラム教、等々、果てしなく続く〈内戦〉状態をヒップホップは記録している。ラップ・デュオ M.O.P. は「これはヒップホップか？ とんでもねえ、これは戦争だ！」と1996年にシャウトした。90年代にはギャングスタ・ラップが大流行し、保守層はその暴力的表現を敵視する一方、メディアは扇情的に取り上げ、音楽産業は黒人のヤバさを商品化して利益を上げた。M.O.P. の主張では、彼らの住む黒人居住地域の現実、ちょっと刺激的な娯楽として消費される心地よいヒップホップなどという商品とは無縁の、サバイバルしなければならない戦場なのだ。ギャングスタ・ラップの流行は去ったが、黒人居住地域をめぐる諸問題、貧困、犯罪、ギャング、銃、ドラッグ、警察の暴力、といった問題はいまもなお残り続ける。

バラク・オバマ元大統領の誕生はヒップホッパーたちに希望を与えた。だが、オバマは大きすぎる期待に応えられたとはいえなかった。「ウォール街を占拠せよ」運動や「ブラック・ライブズ・マター」運動のような巨大な抗議活動は、むしろオバマ時代に発生した。世の中を変えることをオバマは選挙戦のキャッチフレーズにしたが、変わらぬ現状に不満を抱いた人々が抗議の声を次々に上げた。そして、2016年の大統領選では、現状を変えなければならないと考えた人々がメディアにとって予想外の投票行動を起こした。格差社会と人種対立という、多くの人々が変えなければならないと願う現状をオバマは残してしまった。その意味で、ドナルド・J・トランプ前大統領を生んだのはオバマ元



大統領の罪だといえる。

多くのアーティストが2016年の大統領選で民主党ヒラリー・クリントン候補への支持を表明した一方で、一部の著名人はトランプを支持した。そのうちのひとり、女性ラッパーのアゼリア・バンクスは、トランプ支持の理由として、「この国を一度ぶっ壊す必要がある」とツイートした。そこまで現状打破を望む声が出るほど、オバマ政権下の市民は不満を募らせていた。そして、オバマが期待に応えられなかったのに対し、トランプは支持者の期待どおり、4年間でアメリカをぶっ壊した。バンクスは2020年の大統領選でもトランプに票を投じている。

白人至上主義者たちは問題外として、トランプ支持者のなかの、貧困層、移民労働者などは、本来なら民主党が票田として取り込むはずの層である。その票の多くを失わせたのは、クリントンのみならずオバマの失策でもあった。ジョー・バイデン新大統領は、「正しいこと」を行うだけでなく、「正しさ」において分断するふたつの層の両方に配慮しなければならないという、極めてバランス配分の難しい政治判断が求められるだろう。

執筆者について――

金澤智（かなざわさとし） 1965年生まれ。専攻＝アメリカ文化・比較文化。高崎商科大学商学部教授。小社刊行の主な著書には、[『ヒップホップ・クロニクル――時代を証言するポピュラー文化』](#)、[『アメリカ映画とカラーライン――映像が侵犯する人種境界線』](#)、主な訳書には、ヘンリー・ミラー [『冷暖房完備の悪夢』](#)、同『マールシーの巨像』などがある。

【特集——〈内戦〉下のアメリカ】

## 『僕の大統領は黒人だった』と『アメリカの病』に観る アメリカの人種的分断

池田年穂

アメリカは新しく、そして古い国だ。近代共和制という点ではフランス革命よりも13年早い。そして、19世紀にロシアと並んで from coast to coast の大陸国家を建設した。ただし、ロシアが隣接する民族の居住地を次々と実質的な植民地として包摂していったのに対し、アメリカは植民者ないし移民が、個人の資格で西漸し開拓していったという違いはある。もっとも、ここで、先住民とアフリカ系アメリカ人のことに触れざるを得なくなる。ロシアと同様、後発の帝国主義国家として、アメリカは国土の地理的な拡充に努めた。ターナーがアメリカ社会科学の独立宣言書と呼ばれる『アメリカ史におけるフロンティアの意義』を著したのは、1890年の国勢調査でのフロンティアの消滅を前提としていたが、ここでのフロンティアは統計学的な指標は存在しつつも、実質的には先住民掃討の完遂を意味した。その後アメリカは、イエロー・ジャーナリズムの後押しで米西戦争を戦い、フィリピンをはじめ海外領土を持つに至った。小説『アーサー王宮廷におけるコネチカットのヤンキー』やいくつものエッセイで、マーク・トゥエインは残虐なアメリカのフィリピン支配を批判し、その内容は、それから半世紀と少し後のベトナム戦争を予言するものとなった。また、裏庭と呼ぶカリブ海地域から中南米にまで影響圏を持ち、1823年のモンロー主義をいよいよ強化していった。

アメリカは新しく、そして古い国だ。古い国と呼ぶのにはもう一つの要因がある。アメリカは、己が国土を蹂躪されたことがほとんどない。南北戦争（Civil War）は言葉通り内戦であったし、「1812年戦争」は独立戦争の第二ラウンドに過ぎなかった。「9.11」の際の驚愕はそれゆえと言えるのではないか。いずれにせよアメリカは、外圧から来るものであれ、敗北から来るものであれ、リセットする機会を持たなかったと言うことである。日本を顧みると、1868年には外圧によって、土農工商の別を廃して階級制度をドラスティックにリセットした。また、その77年後には、敗戦と進駐によって、中国が長い革命闘争を経てようやく成し遂げる家族制度と土地制度の改革というリセットを果たした。ところが、アメリカにはリセットをする機会がなかったのだ。2020年ほど、煩雑なアメリカの大統領選挙制度について一般の日本人がメディアから情報を与えられたことはなかったろうが、その非合理性も、伝統という聞こえは良いが、リセットの機会がなかったためとも捉えられる。

この10カ月間で筆者は次の4冊の訳書を世に送った。①ティモシー・スナイダー『自由なき世界 フェイクデモクラシーと新たなファシズム』、②パメラ・ロトナー・サカモト『黒い雨に撃たれて 二つの祖国を生きる日系人家族の物語』、③タナハシ・コーツ『僕の大統領は黒人だった バラク・オバマとアメリカの8年』、④ティモシー・スナイダー『アメリカの病 パンデミックが暴く自由と連帯の危機』（いずれも慶應義塾大学出版会）。

日系人差別を扱った②を含め、すべてに人種が絡んでいる。ただ、アメリカの人種主義といえば、なんといってもアフリカ系アメリカ人と切り離せない。タナハシ・コーツは、全米図書賞受賞作『世界と僕のあいだに』（拙訳は日本でのコーツの紹介である）で、「人種は人種主義の子どもであってその父親ではないのだ」と喝破したが、みごとに「白人 vs 黒人」のバイナリズムで世界を観る（この「白人」は one-drop rule で分かるように自らを白人と意識したものというカテゴリーである）。アメリカの人種・民族的なマイノリティとして、黒人は数の面ではすでに最大のものではなくなっている

るが、アメリカの黒人は他に類を見ないマイノリティなのである。白人移民と違って、新来者によって social stratum の上がる可能性のゼロに近いマイノリティ。そして、1619年に連れてこられてから、アメリカの建国と発展を可能にしたマイノリティである。コーツは名高い記事「賠償請求訴訟」(2014年、③に収録)で、アメリカの黒人に対する賠償は、「250年にわたる奴隷制、ジム・クロウ法下の90年、60年間の『分離すれど平等』を経験したすべてのアフリカ系アメリカ人」に対する collective なものでなければならない、と主張している。

スナイダーもまた人種主義による分断についてしばしば述べている。④の中で印象的なエピソードがある。

救急救命室の入り口に控えていた看護師たちは、私のことをあまり真剣に考えていないようだった。私が文句を言わなかったせいもあるが、私に付き添っていた女性 [ンジェリ・タンデ医師] が、医師ではあっても黒人だったためだろう。……私は、救急救命室に入る際に担当してくれた二人の看護師が通り過ぎるのが見えたし、話している内容も聞こえた。「あの人誰なの?」「自分では医者だって言っているわね」。彼女たちは私の友人について話しながら笑っていた。その会話をその時に書き留めることはできなかったが、あとになってそうした。その晩に人種主義が私の生きる可能性を害ったように、人種主義は他の人びとの生きる可能性を、彼らの人生のいかなる瞬間においても害うものなのだ。

そしてことが新型コロナウイルスに至ると、「アメリカでは、最初に、しかも急速に亡くなったのは、概してトランプに投票しなかったアフリカ系アメリカ人だった」のだ。

①の第6章と③のエピローグは、なぜトランプのような破天荒な大統領が誕生したかの優れた解説になっている。注目すべきはホワイト・トライバリズムであろう。巷間伝わるように低所得層の白人だけがトランプを支持したのではないのだ。コロナ禍がなければトランプは腐臭を放ちながらも再選されていたであろうが、スナイダー、コーツ両人が、「やはり権威主義、ポピュリズム、フェイク、加えて分断と格差を政治的資産とするが、ソフィスティケートされた新たなトランプの出現」を予想していることは心に留めておきたい。

執筆者について――

池田年穂 (いけだとしほ) 1950年生まれ。慶應義塾大学名誉教授。専攻=移民論、アメリカ社会史。小社刊行の主な訳書には、エミー・E・ワーナー『ユダヤ人を救え! ――デンマークからスウェーデンへ』、ジェームズ・ウォルヴィン『奴隷制を生きた男たち』、アダム・シュレイガー『日系人を救った政治家ラルフ・カー ――信念のコロラド州知事』などがある。

## ブランシヨと読者

門間広明

ブランシヨは『文学空間』(1955)冒頭を飾る「本質的孤独」において、「作家はけっして自分の作品を読むことはない」と述べている。これはおそらく、サルトルの『文学とは何か』(1948)の「作家は自分が書くものを読むことができない」という言葉をふまえたものだろう。サルトルはその理由を、作家の主観性によって生み出された言葉は、作家本人にとってけっして十全な客観性を獲得できないからだと説明する。彼はそこから、作品が作品として成立するには読者の介入が必要であるとし、作者と読者の共同作業としての文学、両者間でなされる「呼びかけ」としての文学という考えを打ち出した。それに対し、ブランシヨは、作家が自分の作品を読むことができない理由を、作品が「我を読むなかれ (Noli me legere)」という言葉を発し、おのれの起源にあるはずの作者を遠ざけるからだとし、さらには作者のみならず読者をも遠ざけることで作品が行き着く「本質的孤独 (= 孤絶)」に、文学の本質を見る。

この議論は、同書第VI章「作品と伝達」に引き継がれている。そこでも、「作家はけっして自分の作品を読むことができない」と繰り返され、作品は完成されるために作家から逃れ去ることが必要だと述べられている。しかし、より注目すべきは、ブランシヨがそこで「自由」や「呼びかけ」、さらには「ジェネロジテ (惜しみなく与えること = 気前のよさ、高邁さ)」といった『文学とは何か』のキーワードを用いながら、サルトルとはまったく別の読者論を組み立てていることである。ブランシヨによれば、読書とはひとつの自由であるが、それは「受容し、同意し、『然り』と言う、『然り』と言うことしかできない自由」、したがって受動的な、ほとんど不自由すれすれの「自由」である。また呼びかけは、作者から読者に向けてなされるのでも、読者から作者に向けてなされるのでもなく (サルトルはその相互性、双方向性を強調したのだが)、「ある種の呼びかけがあるとしても、それは作品それ自体からしか発せられない」。したがってジェネロジテも、作者や読者に属するものではありえず、ブランシヨが語るのは「作品のジェネロジテ」なのである。ただし、こうして作者と読者をとともに遠ざけ、作品を絶対的に孤立させるブランシヨが、なお文学における別様の「コミュニケーション」について語っていることには注意しなければならない。

いずれにせよ、こうしたブランシヨの記述は、正面からのサルトル批判というより、むしろその議論の独自かつ大胆な書き換えである。そもそも『文学空間』ではサルトルの名は一度も言及されないものであり、ブランシヨを読むうえでは、この仄めかしによる絶妙な距離のとり方と、論敵の言葉を意味をずらしながら再利用する巧妙な手つきにこそ注目すべきだろう。

ところで、同時期にブランシヨと同じく『文学とは何か』への批判的応答を試みた書き手に、メルロ＝ポンティがいる。彼は1953年に「言語の文学的用法の研究」と題する講義をコレージュ・ド・フランスでおこなっており、その準備ノートが2013年に刊行されている。興味深いことに、第2回講義の準備で『文学とは何か』の読者論をとりあげるさい、彼は雑誌に発表されたばかりの「本質的孤独」を参照している<sup>(1)</sup>。また、編者のひとりであるザッカレッコは、メルロ＝ポンティがこの準備ノートにおいて、この時点では未発表のブランシヨの別の論考「読む」(上で言及した『文学空間』第VI章に収録)を「奇妙にも先取りしているように見える」と述べている。もちろんこの「奇妙さ」は、

同じ論敵に応答しようとする共通の企図によってあるていど説明がつくだろう。

じっさいメルロ＝ポンティもまた、サルトルの議論をふまえて、この講義準備ノートに「作家は自分自身を読むことができない」と書き記し、そこから派生する問題について論じている。彼はこの問題に対するサルトルの解決法を、「文学を生のなかに置き直すことで文学を救う、話し言葉としての書物」と要約しつつ、その難点を、「文学はけっして生のように話さないこと、書物はけっして他の行為と同様の行為ではないこと」と指摘しているが、そのとき彼はたしかに、読書はけっして作者との「対話 (dialogue)」——そこにはサルトルが語る作者と読者の「弁証法＝対話術 (dialectique)」も含まれるだろう——ではないとするブランシヨの「読む」を「先取りしている」と言っているように思われる。

最後に付言しておきたいのは、こうした深遠とも抽象的とも見えるブランシヨの読者論が、じつは現代的な読書のあり方がある仕方で肯定するものだという事実である。「読む」において、「平易さに読書の共犯者たることを求める今日の無教養な読者」を懸念するヴァレリー<sup>(2)</sup>に対し、ブランシヨはそうした現代的読者の軽々しさを——そこにはけっして重々しさも欠けていないと付言しつつ——首肯してみせる。それは孤絶した作品を前にひたすら「然り」と言うことしかできない読書の「自由」、したがってブランシヨが考える読書の本質の、別様の現れなのである。「本質的孤独」という文学作品の根本的条件は、現代における読者の軽薄さ、その無力さによっていっそう露わになる、と要約するなら、あまりにアクロバティックな議論と映るだろうか。いずれにしても、この点においてブランシヨの読者論は非歴史的な本質論ではけっしてなく、同時代的現象へのひそかな応答でもある、ということを確認しておきたい。

- (1) メルロ＝ポンティは「本質的孤独」の読書ノートも作成しているが、これは残念ながら活字化されていない。この講義に関連する7つの読書ノートのうち、唯一サルトルのブリス・パラン論「往きと還り」についてのものだけが、この講義準備ノートの付録として公表された。
- (2) このように述べるブランシヨが念頭に置いているのは、おそらく「ときおり私はマラルメに語った……」だろう（『ヴァレリー全集7 マラルメ論叢』鈴木信太郎他訳、筑摩書房、1973年）。ちなみにピエール・バイヤール『読んでない本について堂々と語る方法』（大浦康介訳、ちくま学芸文庫、2016年）を読むと、ヴァレリーが読書に関してこれとはまったく別の態度も示していたことがわかって面白い。

[参考文献]（ただし本文中の引用は拙訳）

ブランシヨ『文学空間』粟津則雄・出口裕弘訳、現代思潮社、1976年。

サルトル『文学とは何か』加藤周一・白井健三郎・海老坂武訳、人文書院、1998年。

Merleau-Ponty, *Recherches sur l'usage littéraire du langage*, éd. Emmanuel de Saint-Aubert et Benedetta Zaccarello, Métis Presses, 2013. 未邦訳だが、その中心的な議論は以下で知ることができる。佐野泰之『身体の黒魔術、言語の白魔術——メルロ＝ポンティにおける言語と実存』、ナカニシヤ出版、2019年。

執筆者について——

門間広明(もんまひろあき) 1976年生まれ。北海学園大学准教授。専攻＝フランス文学。小社刊行の論文には、「焼け残るものへの眼差し——1940年代のブランシヨはバタイユをいかに読んだか」([『別冊水声通信 バタイユとその友たち』](#))、主な訳書には、モーリス・ブランシヨ『クロニック・リテレール 1941-1944』(共訳、近刊)などがある。

## いくつかの結び目

——ユベール・ダミッシュ『カドミウム・イエローの窓』によせて

星野太

いったいどこから始めるべきか——この奇妙な書物について。

そう思っているのは自分だけではないと信じたいが、ユベール・ダミッシュの『カドミウム・イエローの窓——あるいは絵画の下層』(Hubert Damisch, *Fenêtre jaune cadmium ou les dessous de la peinture*, Seuil, 1984) は、すぐれて奇妙な書物である。まず構成が奇妙だ。本書を開いてまず目に飛び込んでくるのは、バルザックの『知られざる傑作』をめぐる長大な批評文であり、なおかつ本書の基調をなす第1章「絵画の下層 (Les dessous de la peinture)」である。通常の階層関係——すなわち「……部 (partie)」と「……章 (chapitre)」の——から考えれば不思議なことに、本書の第I部「イメージとタブロー」は、第1章のあとに来る。しかも、第I部が始まって、そこからすぐさま第2章、第3章……と続くわけでもない。この第I部は「ミルクの上のハエである (Ce sont mouches sur le lait)」という——これまた奇妙なタイトルの——短いテキストとともに始まり (しかもその「タイトル」は目次を見なければわからない)、第2章「視線の目覚め (L'éveil du regard)」が来るのはそのあとである。本書は全10章からなるが、それ以外にも「ミルクの上のハエである」に類する短いテキスト——「芸術、今日、注釈 (L'art, aujourd'hui, le commentaire)」や「パラジャニの3人のブオパ、あるいは凧揚げの大きな祭り (Les trois *bhopā* de Prajani ou la grande fête des cerfs-volants)」——を間奏曲とし (これらの「タイトル」も巻末の目次にしかない)、それが全体として第I部「イメージとタブロー (L'image et le tableau)」, 第II部「定理 (Théorème)」, 第III部「タイトル (Titres)」の3部に区切られている。

本書は絵画をめぐる書物である——では、そこではいかなる絵画が問題となっているのか。

登場順に並べると、モンドリアン (第2章), ポロック (第3章), デュビュッフェ (第4章), アンフォルメル (第5章), クレー (第7章), スタインバーグ (第8章), アダミ (第9章), ルーアン (第10章)。その多くは、そのつど雑誌や展覧会カタログのために書かれたものだ。第6章「戦略, 1950-1960年 (Stratégies, 1950-1960)」のみ、ひとりの画家や潮流にはとどまらない大きな問題を扱っているが、これは同章の初出がポンピドゥー・センターで行なわれた「パリ - ニューヨーク」展 (1977年) への寄稿文であるという事情に拠っている。

各章はいずれも濃密に書かれており、ひとつとして単純な要約を許さない。このたびの訳書 (水声社, 2019年——以下、丸括弧内の訳者、頁数はすべて同書のもの) の「あとがき」で松浦寿夫が書くように、本書には1958年から83年までの四半世紀にわたって書き継がれた広範なテキストが収められているが、その初期のものに属するモンドリアンとポロックをめぐる論文が、「半世紀以上たった現在においても、この2人の画家について書かれた最良の文章のひとつであり続けている」(338頁) という評価はけっして誇張ではない。同時代的なことを言えば、米国の『オクトーバー』誌の最良の成果——とりわけロザリンド・クラウスとイヴ=アラン・ボワのそれ——に匹敵するものが、たしかにここにはあると思わされる。

同時に本書は文学をめぐる書物でもある——しかし、それはいかなる意味においてか。

それは言うまでもなく、本書がバルザックの『知られざる傑作』という短篇小説をめぐる書物だからである。すでにふれたように、本書の第1章「絵画の下層」はこの物語についての詳細きわまる批評である。それだけではない。章ごとに異なる画家を対象とするはずの本書の議論は、いつも肝腎なところで『知られざる傑作』のフレンホーフエルへと立ち戻るのだ。10年以上にわたり《美しい諍い女》という一枚の絵画——あるいは一人の女性——に執心しつづける画家フレンホーフエルと、(実在の画家でもある) プッサン、ポルピュスらを登場人物とするこの物語は、発表後まもなく、絵画をめぐるひとつのアレゴリーへと転じた。本書でダミッシュも引き合いに出しているように、『知られざる傑作』をめぐる逸話として広く知られているのが、「フレンホーフエル、それは私だ (Frenhofer, c'est moi)」というセザンヌの発言である(ダミッシュはなぜか感嘆符「!」をつけて引用している)。むろん、このアレゴリーは本書で言うところの「結び目=錯綜態 (entrelacs)」のごときものであり、それはけっして単一の(わかりやすい)教訓譚に還元されるものではない。

かつて、郷原佳はこのバルザックの小説がもたらした反響を「ピュグマリオン効果」や「バートルビー効果」(Cf. Gisèle Berkman, *L'Effet Bartleby*, Hermann, 2011) と並べつつ、「フレンホーフエル効果」と名づけた(郷原佳「フレンホーフエル効果」、『組立——作品を登る』組立, 2012年, 52-65頁)。事実、この物語に取り憑かれていたのは、セザンヌのような実作者にはとどまらない。ちょうどこのダミッシュの書物が刊行された80年代のフランスでは、ミシェル・セールの『生成』(Michel Serre, *Genèse*, Grasset, 1982 [及川馥訳, 法政大学出版局, 1983年]), ジョルジュ・ディディ＝ユベルマンの『受肉した絵画』(Georges Didi-Huberman, *La Peinture incarnée*, Minuit, 1985), さらにジャン＝クロード・レーベンシュテインやナタリー・エニックらが参加したクロックの記録集 (*Autour du Chef-d'œuvre inconnu de Balzac*, École nationale supérieure des Arts Décoratifs, 1985) など、『知られざる傑作』をめぐる重要な書物が立て続けに刊行された。むろん、著者により関心の所在はさまざまであっただろうが、われわれのダミッシュとはいえば——ふたたび松浦寿夫の言葉を借りるなら——このバルザックの小説にこそ、「1950年代のアメリカの画家たちの思考を拘束した問題群」(338頁)の予型を見てとっていたのである。

ゆえに本書は絵画をめぐる書物であり、同時に文学をめぐる書物でもある。

したがって当然のことながら——とすべきか——、本書において、言葉とイメージ、文字と描線の関係をめぐる観察はとりわけ詳細をきわめる。ヴァレリオ・アダミの絵画を論じた第9章「ロンドンへ向かうS・フロイト (S. Freud en voyage vers Londres)」——本書のメインタイトルである「カドミウム・イエローの窓 (*Fenêtre jaune cadmium*)」はここに登場する——を読めば、それは一目瞭然である。たとえば同章の次のような記述を(やや長めに)読んでみることにしよう。

このタブローは、完全に明白だと思われるのだが、*S. Freud in viaggio verso Londra* (《ロンドンへ向かうS・フロイト》)というタイトルをもち、さらに、余白のようなページ下に、カンヴァスの横幅いっぱい到手書きの文字でこのタイトルが提示されている(この余白の非常に暗い赤色という色調のせいで、この書き込みを判読するために二度も見直さなければならないのだが)。このタイトルの提示は一部が欠けた形でなされている。Londraという言葉の二つ目の文字のあとのところがタブローの端によって中断させられてしまっているのだ。《ジークムント・フロイト博士》というシンプルなタイトルをもつタブローのなかの二つの名前もこれもまた同様に中断させられている。ひとつは本人の名前 [Freud], もうひとつは出版された場所として『夢解釈』

のタイトルページに載せられている二つの街の名前のうちの片方〔Wien〕である。このタブローでは、アルピニストが一本の線にまたがって線にピッケルをひっかけようとしているのだが、このタブローのイメージがこの線に沿って色が変わるところで折れ曲がってしまっている。このイメージは次のようにタブローの秩序のなかに組み込まれている。まずフロイトの名前であるが、三つの最初の文字 FRE に縮められており、これは、連想によって、固有名からなる意味深い星座を出現させる。『知られざる傑作』の画家フレンホーフエル〔Frenhofer〕、論理学者のフレーゲ〔Frege〕、そしてさらにベルリンの弁護士フライハウ〔Freihau〕〔……〕であり、このフライハウはフロイトのボスニアへの小旅行のお伴をした。この旅行のあいだにシニョレリの名前のかの有名な言い間違いが起こったのであり、そこから『日常生活の精神病理学』が書き始められるのだ。続いて、ウィーンの街の名前だが、この最初の三つの文字 WIE, [ドイツ語で] のように、がタブローの右下隅に書き込まれており、一つの問いかけとしてあるのだが、このイメージの比喩的な作用は始まると同時に無効になってしまっている。(坂口周輔訳, 229-230 頁)

こうしたくだりを読んでいると、やはり同じ時期にアダミについて書いていたりオタール (Jean-François Lyotard, *Que peindre ? Adami, Arakawa, Buren*, Éditions de la Différence, 1987) や、デリダ (Jacques Derrida, *La Vérité en peinture*, Flammarion, 1978 [高橋允昭・阿部宏慈訳, 法政大学出版局, 2012 年 [新装版]]) のテキストを想起せずにはいられない。しかし、本書に登場するほかの画家とくらべてさほど知られていない——と思われる——このヴァレリオ・アダミ (1935-) という芸術家については、いつかまたあらためて論じたいと思う。

最後に、いささか個人的な「出会い損ない」の記憶を書き留めておきたい。

ユベール・ダミッシュは 2017 年に亡くなった。89 歳だった。わたしはダミッシュに会ったことはないが、生前いちどだけ、その聲咳に接する機会があるはずだった。2008 年 1 月 7 日、当時の日記によると、フランスに留学中であったわたしはリヨン美術館に出かけていったらしい。リヨン美術館では前年 10 月 7 日から、哲学者のジャン＝リュック・ナンシーが企画した「デッサンの快楽 (Plaisir au dessin)」という展覧会が行なわれていた。その関連企画として、同美術館では計 3 回のセミナーが実施された (わたしはそのすべてに足を運んだ)。各回のゲストはジャン＝クリストフ・バイイ (第 1 回)、ジャクリヌ・リシュテンシュタイン (第 2 回)、そしてユベール・ダミッシュ (第 3 回)。2008 年の 1 月 7 日はその最終回にあたり、同日の 18 時半から、美術館の展示室内でダミッシュとナンシーの対話が行なわれるはずだった。

しかしいざ足を運んでみると、何らかの事情によりダミッシュの出演は急遽キャンセルされ、当日は詩人のピエール・アルフェリが代理のゲストとしてナンシーの相手役を務めていた。本書『カドミウム・イエローの窓』を読みながらそのことを思い出したのは、むろん故なきことではない。というのも、本書には前出の「ロンドンへ向かう S・フロイト」に続けて——つまり、第 9 章と第 10 章のあいだに——「デッサンの戦略 (La stratégie du dessin)」と題されたもうひとつのアダミ論が収められていたからである。

よく知られたことだが、ダミッシュはそこで、フランス語では——18 世紀以来——デッサン (dessin) と意図 (dessein) に分かれてしまった二つの単語が、イタリア語ではより近いものであるという事実注意到をうながしている——「ディゼーニョ [disegno] はイタリア語では、制作という技巧的な言葉で定義できるような活動を指すだけではないのだ。実質的な作品化や制作における具体的なプロ



セスというよりもむしろこの言葉は、知的で、構想を伴った活動を指すのであり、その活動の瞬間は、前に投擲すること〔pro-jet〕、紙の上の一つの提示＝前に置くこと〔*proposition*〕を投擲する（前に一投げる pro-jection）ことに相当する。この言語学的喚起はアダミのような芸術家が問題となるときおそらく無駄ではあるまい」（坂口周輔訳、258頁）。

いまから10年以上前の、「デッサン」をめぐるナンシーとの——実現しなかった——対話のなかで、ダミッシュならば何を語っただろうか。そんなことをあれこれ想像しても詮無きことだが、すくなくともここには書かれたテキストがある。原著から35年を経て訳出された本書は、そうした——いささか個人的な記憶も含めた——アナクロニーとともに、われわれの前に差し出されている。

\* ユベール・ダミッシュ『カドミウム・イエローの窓——あるいは絵画の下層』（岡本源太＋桑田光平＋坂口周輔＋陶山大一郎＋松浦寿夫＋横山由季子訳）は小社より2019年12月に刊行されました。詳細は[こちら](#)をご覧ください。

執筆者について——

星野太（ほしのふとし） 1983年生まれ。早稲田大学専任講師。専攻＝哲学、表象文化論。主な著書、訳書には、『崇高の修辞学』（月曜社、2017年）、ジャン＝フランソワ・リオタール『崇高の分析論——カント『判断力批判』についての講義録』（法政大学出版局、2020年）、小社刊行の論文に、「アペイロンと海賊——『雲』をめぐる断章」（『午前四時のブルー I 謎、それは自分』）がある。

## ケアとごまかし

田口陽子

(掃除婦たちへのアドバイス:奥様がくれるものは、何でももらってありがとうございますと言うこと。バスに置いてくるか、道端に捨てるかすればいい。)

(掃除婦たち:手抜きしない掃除婦だと思わせること。初日は、家具をぜんぶまちがって戻す——5インチ, 10インチずらして置く,あるいは向きを逆にする。)

[……] 全部をちょっとずつまちがうと、仕事がいねいだと思ってもらえるだけでなく、奥様がたも心おきなく“ボス”になれる。アメリカの女は使用人を使うことに後ろめたさを感じている。

ルシア・ベルリン『掃除婦のための手引書』(岸本佐知子訳, 講談社, 2019年)。

デヴィッド・グレーバーは、何らかの仕事についている人自身が無意味で不必要で有害だとすら感じながらも、「そうではないと取り繕わなければならないように感じている」仕事のことをブルシット・ジョブとよんだ。人材コンサルタントや企業の顧問弁護士, 大学を含めたさまざまな官僚制度に組み込まれた職業が典型的な事例であり, そうした仕事は効率と利益を追求するはずの資本主義社会で増加しているという(『ブルシット・ジョブ』酒井隆史他訳, 岩波書店, 2020年)。

ケア労働は, 一般的に, (欺瞞やごまかしからなる)ブルシット・ジョブとは対極の(本質的で必要不可欠な)エッセンシャル・ワークに位置づけられる。しかし, 仕事内容に意義があったとしても, 給料に見合った仕事をさせる(「他者の時間を買う」)という雇用の道徳のせいで, ブルシット・ジョブに変わってしまうこともある。

たとえば, グレーバーは次のような事例を紹介している。ニューヨークで一人暮らしをする高齢の祖母を見守るために, 家族はある女性を雇った。彼女は祖母が倒れたり介助が必要になった時のために雇われたので, 普段は買出しや洗濯の手伝い以外, とくにすることがなかった。すると祖母は, 「あのひと, そこに座っているだけじゃないの!」と怒り狂ったのだという。家族は女性に, ほかに用事がなければクローゼットなどの整頓をするよう頼んだものの, その作業もすぐに終わってしまい, ふたたび祖母の怒りを買うことになった。結局彼女は, 「ブルシットな時間つぶしの仕事をたくさんつくって仕事をしているようにみせかけなければならなかった」ために, 「深く尊厳を傷つけられて, 体調も崩して仕事を去っていった。

私が長年お世話になっているインド, ムンバイの友人の家には, さまざまな家事労働者が雇われていた。アメリカとは違い, インドの「奥様がた」は使用人を使うことに後ろめたさを感じていないよ

うで、そこにはヒエラルキーにもとづいて使用人の面倒をみるという別の道徳が作用していた。しかし、「他者の時間を買う」という雇用の道徳は、インドの家事労働者にも影響を与えている。近年の都市部のミドルクラス世帯では、メイドやその家族の面倒をみるよりも、パートタイムで通いのメイドを雇い、皿洗いや床掃除など細かいタスクに細分化された仕事に対して賃金を払うシステムの方が好まれているようだ。

とはいえ、家事労働はあらかじめ決まったタスクごとにきれいに分けられるものではない。一緒にテレビを観たり、お茶を飲みながら話をしたり、ただ座っていることも、メイドの仕事から切り離すことはできない。雇用主家族の一員である私の友人は、夫に先立たれた義母と毎日テレビドラマを見ている住み込みメイドについて、ケア提供者ではなく「単なるカンパニー」（一緒にいる人）だと話していた。

さまざまな職種でブルシット・ジョブにつく人たちは、何かをごまかしながらもごまかしていることを認められない状況を強いられることに傷ついている。ここには、働くことについてのねじれた道徳が作用している。この道徳は、いざというときに必要な人や、直接的ではなくてもケアにかかわる人の仕事を奪うことにもつながっている。では、どうすればいいのだろうか。ただの（シット）ジョブかもしれないものをブルシット・ジョブに変えてしまう道徳を捉えなおし、乗り切るためには、正しい市民による責任ある決断や賢明な消費者による合理的な選択よりも、アネマリー・モルが論じたケアのロジックが役に立つかもしれない（『[ケアのロジック](#)』水声社、2020年）。ケアのロジックは、個人の選択に責任を負わせるかわりに、人や物や環境に手を加えることで、集合的によりよい生を作っていこうとする。そこでは、何が善いのか、悪いのかという道徳的基準も、行為に埋め込まれている。何がケアになるのか、何が自らの尊厳をも傷つけてしまうブルシットな行為になるのかの差も、集合的な実践のなかで立ち現れてくるものなのだろう。

私たちにとってのよりよい生活は、演じたり、取り繕ったり、手直ししたりするなかで、日々作られている。「物語を語ろう。ケースヒストリーを語ろう」。まずは、奥様たちについての噂や、うまいごまかし方について語り合うことから始めてみてもいいのかもしれない。

執筆者について――

田口陽子（たぐちようこ） 1980年生まれ。専攻＝文化人類学、南アジア地域研究。県立広島大学新大学設置準備センター准教授。小社刊行の著書には、[『市民社会と政治社会のあいだ――インド、ムンバイのミドルクラス市民をめぐる運動』](#)、小社刊行の主な訳書には、アネマリー・モル[『ケアのロジック』](#)、デボラ・ジニス[『ジカ熱――ブラジル北東部の女性と医師の物語』](#)（いずれも共訳）などがある。

【連載】

## 翻訳のない世界

—Books in Progress 6

関根慶

翻訳が存在しない世界を想像することができますか？——『耳のなかの魚』（David Bellos, *Is That A Fish in Your Ear? – Translation and the Meaning of Everything*, 2011, Penguin Books）の著者、デイヴィッド・ベロスはそう問いかけます。

いうまでもなく、さまざまな国のニュースを見たり、小説を読んだり、国際会議から家具の取扱説明書にいたるまで、私たちの生活はさまざまな「翻訳」に取り巻かれています。小社の出版物に海外文学や研究書の翻訳が占める割合も、決して小さくありません。

しかしベロス氏は、たとえ翻訳や通訳というものがまったく存在しなかったとしても私たちは立派にやっていけるだろう、といます。それどころか、翻訳や通訳が存在しないという状況は、すでに歴史的事実として頑然と実在したとさえいうのです。

ところが、それでもわれわれは翻訳なしでもやっていけるだろう。翻訳を用いるかわりに、関わりたいと思う共同体の言語をすべて学べばよい。あるいは、みんなが同一の言語を自分たちの言語とすることに決めてもいいし、もしかしたらほかの共同体と意思疎通するため共通語をひとつ採用してもよい。しかし、共通語の採用にしり込みし、さらに必要とする多言語の学習を拒んだとしても、われわれはまた、自分たちと違う言語を話す人たちをたんに無視することもできる。  
(『耳のなかの魚』第2章より)

ここに示されている三つの方法、「①関わり合う他の言語すべての習得、②言語の統一ないしは共通語の採用、③他の言語使用者の無視」はいずれも一見極端ですが、ベロス氏によれば、身の回りに翻訳があふれている現在の状況よりも、歴史的には「標準的な状態」であるといえます。

例えばインド亜大陸では、日常的にウルドゥー語、ヒンディー語、カナラ語、タミル語、マラーティー語が話されていながら、つい最近までこの5言語の間では翻訳はなされていませんでした。ここでは伝統的に、人びとはそれぞれ三～五つの言語を使うことができ、一つの言語しか知らない住民はわずかだったために、翻訳という手続きを踏むことなくコミュニケーションすることができたのです。

このような古今東西のさまざまなエピソード（古代ローマ帝国からジョルジュ・ペレックの実験文学 [ベロス氏は『[ジョルジュ・ペレック伝](#)』の著者でもあります]、果てはニュルンベルク裁判から映画『アバター』まで）を取り上げつつ、ユーモアたっぷりに「翻訳」の本質に迫る、博覧強記の著者による型破りな翻訳論、『耳のなかの魚』（仮題）をどうぞお楽しみに。

執筆者について——

関根慶（せきねけい） 1994年生まれ。水声社編集部所属。

【連載】

## 大八木監督から石川選手へ

——裸足で散歩 6

西澤栄美子

2021年1月3日、箱根駅伝復路9区終了時点で、トップの創価大学とは3分19秒差のあった最終10区のアンカー勝負で、駒澤大学の石川選手は20.9キロ付近で創価大学の小野寺選手に追いつき、一気に抜き去りました。その時、駒大の大八木監督は、「おまえ男だろ!」「男になれ!」と、運営管理車から鼓舞し続けました。テレビから監督の声が聞こえてきた時、筆者は、「またか」とがっかりしました。この日の夕方のデジタルニュースでは、この激励の言葉が見出しに取り上げられ、石川選手の、この言葉に大いに力を得たというコメントも載っていました。翌4日の『朝日新聞』朝刊の記事には、「『いいか、ここだ、ここからだ!』監督の活でスイッチオン」との小見出しが掲げられており、これに、石川選手の「スイッチをオンしてくれた」という言葉が掲載されていました。新聞の小見出しの監督の激励は、戦後、アンカー勝負で3分19秒の差を逆転した例はないというときに、石川選手の走り出しに向かって送られた言葉です。走り出しの時の監督のこの活が、石川選手に力を与えたことは確かでしょう。しかし、なぜ、新聞掲載時には、クライマックスで何度も繰り返された言葉「男になれ!」が取り上げられなかったのでしょうか？ 筆者は『朝日新聞』のこの選択は正しいと考えます。言葉は発せられるごとに世の中に拡散し、ある既成事実として受け入れられ、繰り返されてゆくからです<sup>(1)</sup>。

1月1日のTBSラジオ『新時代の言葉会議』<sup>(2)</sup>が指摘するように、夫を主人、妻を奥さんと呼ぶこと、女流〇〇、プロ野球の捕手を女房役、同じく外国人選手を助っ人外人、イクメン（なぜイクウーメンはないのか）、女々しい、美人すぎる〇〇、肌色、〇〇児の母、愛され〇〇、モテコーデなどの言葉が相変わらず使われています。最近ではジェンダーについて学んだばかりの高校生が、ファミリーマートの御惣菜に使われている「お母さん食堂」<sup>(3)</sup>に異議を申し立て、署名を集めました。（家庭で食事を作るのはお母さんだけの役目？）

言葉の問題は一つ間違えば言葉狩りに繋がりがかねません。筆者は差別語には断固反対ですが、フランス文学の『びっこの悪魔』<sup>(4)</sup>と訳されてきた古典を、フランス文学会で『足の不自由な悪魔』と言い直して行われた研究発表には、違和感を持ちました。正解は無いながら、言葉に対して敏感でなければなりません。

(1) ジャーナリズムの問題としては、『朝日新聞』朝刊が「男になれ!」という監督の激をとりあげなかったのは、一種の忖度とも考えられます。論議を呼ぶところです。2021年1月18日7時2分配信のデジタルニュースサイト『現代ビジネスライフ総合』には、明治大学高峰修教授の「『優勝したのに水を差すな』と箱根ファンの皆さんはおっしゃるだろう。だが、そうやって日本のスポーツ界は、ジェンダーやハラスメントといった人権感覚に気づかない勝利者を放置してきたのではないだろうか。[……] そのような声掛けを続けられた部員は指導者になったり、親になったりしたときに何ら疑わず同じ言動をするかもしれない」との言葉が掲載されています。

(2) 2021年1月1日22時～23時55分にTBSラジオで放送された特別番組。出演者は武田砂鉄、ジェーン・スー、サンキュー・タツオ、飯間浩明。

- (3) 筆者は「お母さん食堂」に対して、高校生の指摘があるまで違和感を覚えませんでした。これも「すりこみ」があったからですが、割烹着を着た古風な「お母さん」をわざとらしさなく演じているのが、男性の香取慎吾であったことにも原因がありました。女性が演じていれば、筆者を含めてもっと多くの人が違和感を持ったと思います。「私作る人」「僕食べる人」と、料理を作る側と食べる側の性差を固定したCMへの抗議以降、行きつ戻りつしながらもCMは少しずつ変化しつつあります。
- (4) 『びっこの悪魔』(Le diable boiteux)、スペインのゲバラ(1570-1644)の作品を18世紀フランスの作家ルサーージュが翻案したもの。

執筆者について――

西澤栄美子(にしざわえみこ) 1950年生まれ。もと成城大学講師。専攻=美学, フランス文学。小社刊行の主な著書には、『書物の迷宮』, 主な訳書には, クリスチャン・メッツ『映画記号学の諸問題』(共訳), 同『映画における意味作用に関する試論』(共訳) などがある。